

なからぎ

161号

2002年10月

先人の知恵袋は図書館に有り

人間環境学部長 中坊幸弘

ゴキブリは人間の食べ物でしょうか？と問い掛けると一人の例外もなく、人間が食べるものではないという答えが返ってきます。そうですね、非常時ならいざ知らず、これほど食べ物が豊富な状況でゴキブリなんてと考えるのが普通です。でも、さらに問い掛けることにします。ゴキブリのあの光沢ある体からどんなガンにも有効な発癌抑制物質が見つかったら、あなたは無関心でおられますか？それでもゴキブリを口にしませんか？と。私達が食べる、食べないという判断はその程度のことでは決めているのが実態です。私達が取り扱っている人間の食べ物とは、人間が食べることができるものの全てを指しています。例えば、世界の昆虫食に関する本(『虫を食べる人びと』三橋淳編著 平凡社 1997)では、様々な昆虫が人びとの食生活を支えていることを教えてくれます。仕方なくゴキブリを食べて生き延びた人やゴキブリを食べる習慣のある国の話などもそこには記述されています。

私達が今では当然のように食べ物としているものも、大袈裟に言えば有史以前から、人々の生死をかけた犠牲のうえに成り立っています。もっと身近なところでは、この季節、山菜やきのこ採りに出掛ける人も多いことでしょう。食べられるきのこ、毒きのこの判別は図鑑によって知ることができます。食べても大丈夫かどうかの判断は、親や周りの大人から教えられ学んできましたし、自らの経験などから体得するものでした。ところが、日本ではここ数年、異臭や味が変にも関わらず飲み込んでしまい食中毒となる例、時には命に関わる事故や事件が増えています。なかには摂取時には何ら異常がなくとも数十年後に障害をもたらすBSE蛋白質や体内蓄積によって障害があらわれる違法添加物や残留農薬などの例もあります。

本来、食の漢字は人に良いという意味の漢字です。それが少し怪しくなっています。気づかないこともあります。先人の知恵は伝承されてこそ、その時代に生きるのです。昨今の家族環境では、人から人への口伝が途切れがちになっています。そんな時代を生き抜くためには、やはり文字に頼り知識を得る学習が大切なようです。それが生きる知恵ともいえます。これまでの書物に代わって、今後は電子媒体も駆使して、若者達は検索を繰り返しながら生きる術やマニュアルを入手して生きていくのでしょうか。食に関する一事を取ってみても、書物や情報源である智の集積場としての図書館(大学附属に限らず)の重要性は益々高まるばかりだと思のですが如何でしょうか。(関連図書：『もの食う人びと』辺見庸著 共同通信社 1994 角川文庫版もあり)

(なかぼう ゆきひろ 人間環境学部教授)

読書の周辺

図書館運営委員 富士田 邦彦

本を読んでいて、本との関わりは時と心状の影響が大きいと思うことがある。小説や随筆でも、気力体力充ちている時と心疲れしみじみとした時とでは、求める本は違ってくる。また、かつて一読して何気なく読み過ぎた一節が、再読した折に思わぬ光彩を放ち、本の真価を再認識することは少なくない。私の場合、小説では夏目漱石の「吾輩は猫である」などがそうである。文中のエスプリの利いた表現は、一定の年齢になって初めて玩味し得る。ジャンルの別なく、ひとかどの文筆家の作品を、名著古典に限らず再読三読して新たな意味や魅力を発見することが私には多い。

それに加えて、内容の本筋とはいえない箇所が深く心に残ることもある。その点で、書物のダイジェスト版は勧められない。さらに、本の中身の外縁部分への関心が核心を照射したり、一片の興味が昂進して、当該書籍を越えた広がり展開することも稀ではない。ここでは、趣味にまつわる本を読む楽しみを述べたい。

私は歌舞伎が好きで、観劇歴は四十数年になり、関連する本も少なからず読んだ。歌舞伎は、今では固定した様式美をもつ伝統芸能と扱われているが、特に世話物は、当時の現代劇であり、世相を写すものだった。当今のテレビのワイドショーや週刊誌の特集と同様に、世俗の事件や関心をとりあげて速報的に判りやすく情報を提供する貴重な手段のひとつであった。因みに、大げさにも見える役者の見得は、今日でいうクローズアップの手法であり、廻り舞台やせり上がりの舞台装置とともに浅葱幕を一瞬にして落とす場面転換は、近代劇を上回る技法といってよい。役者の所作や舞台進行にデフォルメと特殊な慣行があることは確かだが、そのゆえにこそ、生ま生ましい敵討ちや心中事件に犯罪までが、洗練されて美の次元に昇華されている。加えて、作劇者の才能は、心性を見据えた名文を紡ぎ出し、時代を越えた人の生のあり様を語りかけてくる。梗概を示す浄瑠璃と随所の台詞に見る細やかな

情緒は掬するに余りあり、その含蓄を味わうために戯曲集を繙き、その真髄を確かめたりもする。

芝居を観続けていると、同じ狂言に再三触れることも多いが、本と同様に、その都度新しい発見があって興味は深まり、役者の芸談にも手を伸ばす。二世実川延若の「延若芸話」、四世尾上松助の「松助芸談」などは、演技の工夫のみならず、当時の人々の暮らしの諸相を描き、興の尽きることはない。

良い舞台は、アンサンブルの妙が作り出す。作品自体の出来が大前提ではあるが、主役を囲む脇役・端役が整っていることで舞台は生きる。大物役者を揃えた大顔合わせの興行も結構だが、適材の役者が所を得て持ち分を果たすことで舞台の完成度は高まる。本でも同じであろう。全体の構成の中で、主題を際立たせる各部分の丹念な叙述があってこそ秀れた成果が得られるのである。

芝居に登場する土地や事象へも興味は連なっていく。京都には、「忠臣蔵」の一力茶屋を初めとして、「寺子屋」の芹生の里、「楼門五三桐」の南禅寺山門、「車引」の吉田神社など芝居に縁りの場所が多く、新歌舞伎「鳥辺山心中」では、夜更けの四条河原での半九郎とお染の哀切な心中行が美しく描かれている。先日訪ねた伊豆修善寺でも、岡本綺堂作「修善寺物語」で將軍頼家が述懐する「温かき湯の湧くところ、人の熱き情けも湧く・・・」の名台詞が思い起こされたことであった。

歌舞伎への耽溺ぶりが少しく度を過ぎたようだ。実はもうひとつの趣味の相撲についても語ろうと思ったが紙数が尽きた。同僚の某先生は、「授業はステージ、服は衣裳」を信条としておられるが、私も同感で、授業の場は「舞台または土俵」と心している。

私は来春退職するが、教員生活を続ける予定であり、晴耕雨読は無理にせよ、せめて雨読で私なりの読書を続行したいと念じている。

(ふじた くにひこ 福祉社会学部教授)

文学部文学科国文学・中国文学専攻の
「中国文学関係図書」

小 松 謙

文学部文学科国文学・中国文学専攻は、国文学・国語学と中国文学が一つの専攻にまとまり、すべてを関連づけて学ぶことができるという、全国でも他に例を見ないユニークな専攻です。この目的を達するためには、それぞれのジャンルについて一定以上の水準で教育・研究を行うとともに、それにふさわしい資料の充実も求められることは言うまでもありません。幸い、近年大規模な中国文学の叢書が幾つか比較的安価に刊行されましたので、特に小説などの白話文学についてはかなり充実した蔵書をそろえることができました。

本専攻の中国関係資料としてまずあげるべきなのは『四庫全書』でしょう。これについては以前に『なからぎ』でもご紹介したことがありますから、詳しくは述べませんが、清代中期、当時存在した著述のうち、残す価値があると判断されるものをすべて集めた壮大な叢書です(現在は図書館書庫にあります)。従って『四庫全書』さえあれば、清代中期以前における中国の主な文献はほとんどそろっているということになるはずなのですが、実はそこには盲点があります。『四庫全書』は当時の知識人の目から見て価値があると認められたものだけを集めていますので、知識人がまじめに読むべきものとはされていなかった白話(話し言葉)による文学作品、つまり『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』など、中国文学の中でも日本人に一番親しみ深い小説や、『西廂記』のような戯曲は全く含まれていないのです。ところが今日では、白話文学は中国文学でも特に重要なジャンルとされており、しかも江戸時代以来日本人にも広く読まれて大きな影響を与えてきました。そこで次に白話文学関係の資料をそろえる必要が出てきます。

『三国志演義』や『水滸伝』は、今日もお多くの愛読者を持っていますので、活字によるテキストは多数刊行されています。ところがそれらは商業的出版物であるだけに、校訂がいい加減なものが多いのです。しかも白話小説は版本により文章や内容が大幅に違うこ

とがありますので、学問的に研究しようとするれば、どうしても明代や清代に刊行された古い版本を見なければなりません。従来各地に散在するそれらの本を見て歩くのが大変だったのですが、最近になって白話小説の主要版本を影印(原型のままのコピー)で集めた叢書が二つでました。上海古籍出版社の『古本小説集成』と中華書局の『古本小説叢刊』です。前者は数百冊に及ぶ大規模なもので、多少ミスや解題の誤りが目に付くものの、これさえあればほとんどの白話小説の主要版本をいながらにして見ることができます。後者は規模としては劣りますが、仕事のレベルとしてはまさるようです。本専攻には前者が全巻そろっているほか、後者については私のものを学生の皆さんにもご利用いただけるようにしています。

また、白話文学のもう一つの重要ジャンルである戯曲については、『古本戯曲叢刊』という影印シリーズがかつて刊行されていました。これは今となっては入手不可能なのですが、第一～五集のうち、第一・二集の一部と第四・五集は私がやはり持っておまして、必要なときにはご利用いただけます。また明代に刊行されたさまざまな戯曲選集を集めた『善本戯曲叢刊』は、本専攻の蔵書としてそろえられています。これらを総合しますと、白話文学に関しては、本専攻の蔵書はかなりのレベルにあるといってもよいでしょう。また『四庫全書』に含まれない文献を多く含む『叢書集成』



『水滸伝』(容与堂本)『古本小説集成』所収

図書館からのお知らせ

集密書架設置に伴い、下記のとおり書庫の様態替えをしました。

書庫分の洋図書は全て3階書庫にまとめました。

1階書庫にあった自然科学(4~6門)の和図書は、3階書庫に移しました。

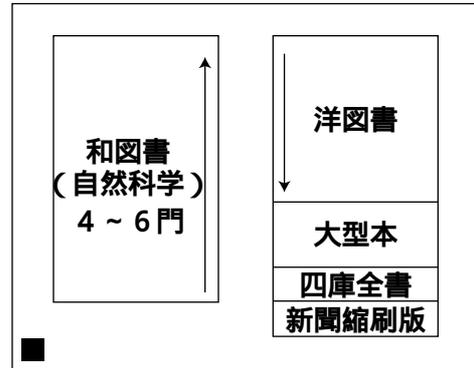
書庫内資料の配架案内図

3F 書庫内の風景

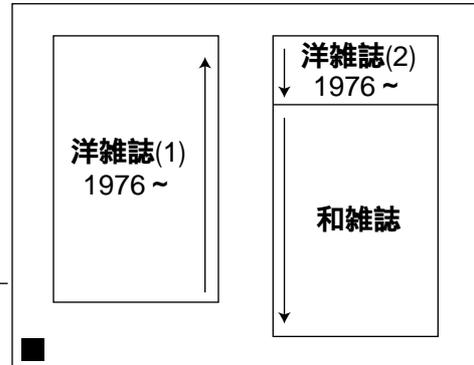


各書架側面のハンドル中央のボタンを押すと スライド可能に
引くと ストッパーがかかり固定します。

3F

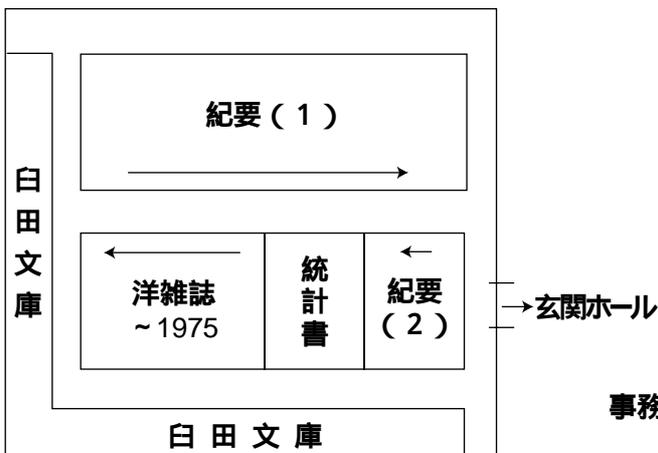


2F

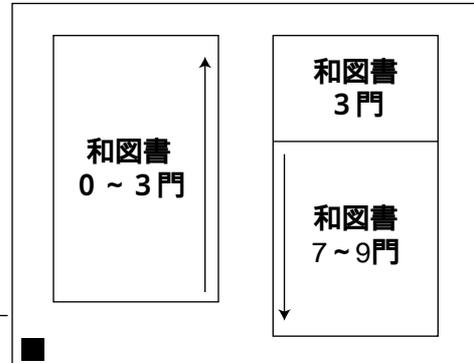


閲覧室 ←

1F 東書庫



1F



事務室 ←

■ ...EV

図書館日誌

平成14年9月24日(火)、平成14年度第2回図書館運営委員会が開催され、その主な内容は次のとおり。

まず、平成15年度当初予算要求書案について事務長から説明の後、協議・承認された。

主要事項の図書館情報化については、図書館情報管理システムの完成、多言語対応、蔵書データの遡及入力計画について説明し、図書館の現状と課題をまとめた「ハイブリッド型図書館構築に向けて」(検討素材)を提案、協議の後、委員会として文書を確認した。

また、利用者から要望の強いマイクロリーダーの更新について要求すること、及び「NACISIS情報検索サービス」機関別定額制利用料金について、新たに計上することなどがあげられた。

次に、今年度の図書館新規購入資料リストと執行計画を報告し、原案のとおり了承され、図書購入費の充実についても、引き続き要求していくことになった。

なお、夏期休業期間を利用して施工した2、3階の書庫整備については、集密書架の設置工事完了とそれに伴う図書移動及び資料配架調整状況(本号5頁の配架案内図参照)も報告された。

行事予定

10月

- 1日(火)～31日(木) 通常開館
開館時間：午前9時～午後8時
- 14日(月) 休館 (体育の日)



11月

- 1日(金)～29日(金) 通常開館
開館時間：午前9時～午後8時
- 5日(火) 休館 (創立記念日)
- 8日(金) 4時45分閉館
(六公立戦)
- 21日(木) 4時45分閉館
(推薦入試)

12月

- 2日(月)～20日(金) 通常開館
開館時間：午前9時～午後8時
- 10日(火)～1月9日(木)
冬休み長期貸出
(貸出冊数 6冊以内)
(返却期限 1月14日(火))
- 23日(金) 休館 (天皇誕生日)
- 25日(水)～1月7日(火)
冬期休業
開館時間：午前9時～午後4時45分
- 28日(土)～1月5日(日)
休館 (年末年始)

鍵付きロッカー利用のお願い

床や机の上に荷物を放置されている方を多く見受けます。

室内の整理整頓と事故防止のため、閲覧室へはカバン、袋物等を持ち込まないでください。(但し、貴重品は各自で管理願います。)入室の際、受付カウンターで「図書館利用カード」をお示しの上、ロッカーの鍵をお受取りください。

新年は1月6日(月)から開館